

追悼 川井充先生

国立病院機構東埼玉病院

臨床研究部長

尾方 克久

国立医療学会理事と本誌編集委員を務めておられました、国立病院機構東埼玉病院第7代院長 川井充先生は、2016年9月23日に63年の生涯を閉じられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

川井先生は、1978年に東京大学医学部医学科を卒業された後、神経内科に入局され、臨床神経学および病理学的手法による神経・筋疾患の病態研究に取り組まれました。国立病院には3病院に4期、計25年にわたって勤務され、おもに神経・筋難病の診療と臨床研究に当たられました。1983年に赴任された国立療養所下志津病院では、学位論文となった「Duchenne型筋ジストロフィー症の骨格筋CT所見と、これにもとづく病期分類」の研究をまとめられ、今では筋疾患診療で一般的となった骨格筋画像診断の端緒を開かれました。下志津病院には1992年に再度赴任され、人工呼吸療法や心不全薬物療法の進歩により生命予後が伸びていく時期の筋ジストロフィー医療を担い、医療と療養の向上に努めつつ、後進の医師や医療・福祉職の教育に励まれました。1997年に国立精神・神経センター武蔵病院へ移られ、筋疾患と神経難病の診療に当たられるとともに、筋ジストロフィー臨床研究班の班長として斯界を9年間率いられました。2004年に国立病院機構東埼玉病院へ副院長として栄転され、独法化直後の病院経営や、障害者自立支援法施行に伴う筋ジストロフィー病棟の制度変更といった過渡期の病院運営を支えられました。院長に昇任されてからは、病院運営や神経・筋難病医療といったそれまでの枠を超え、国立病院機構や地域医療の全般を見据えておられました。また、従来は研究班が中心となっていた筋ジストロフィー臨床研究の場として「筋ジストロフィー医療研究会」の発足に尽力されました。定年までの2年半は、これまで約40年間の先生の取り組みの集大成となるはずでした。その矢先に急逝されたことは痛恨の極みです。あまりにも突然で、誰よりもご自身が驚かれたことと思います。

私にとって神経内科医としての初任地となった国立療養所下志津病院での初日、1995年6月1日の夜に、偶然ご一緒した四街道駅前の小料理屋で、とんかつ定食を食べながら先生から宿題を言われました。「治るはずのない病気の患者とその家族が、なぜ万難を排して毎月外来に通うのか？その意味がわからなければ神経内科医は務まらない、ここに居る1年で、その答えを自分で考えてね。」先生とご一緒した21年間、私はこの宿題をずっと考え、答案を書き直し続けています。とうとう模範解答は直接教えていただけませんでした。自ら考える余地を残してくださった先生のご配慮と申しますし、先生ご自身が私にとっての模範解答でした。

臨床神経学だけでなく、酒の飲み方や鉄道のことまで、先生には多くのことを教えていただきましたが、それ以上にさまざまなことを学びました。置かれた状況に不平を言わず、与えられた条件の中でベストを尽くすこと。自分のすべてを惜しみなく若い人に学んでほしいが、その成果は自分がいなくなってから花開くはずだから、教育とは見返りが無いものだということ。事業は、自分がいなくなっても進むような持続可能性が重要なこと。どれも直接言われたことはありませんが、「師の一挙手一投足が教えであり、それを自ら学ぶこと」もまた、先生から学びました。

病院で医師に求められることのすべてを先生は教えてくださいました。あと2年半、先生から学ぶべきことはまだたくさんあったはずですが、いつものように先生は、自分で見つけて考える余地を残してくださったのでしょう。

何より、先生の想いを承け継ぐ仲間が、こんなに大勢いるのです。僭越ながら、これこそが先生の最高の業績と信じております。

先生から教わったことのすべてを後輩達に伝え、また先生が遺された宿題を果たすよう、皆で力を合わせて頑張ります。

大丈夫です、あとはみんなでやっときます。ご心配なく。

心から、ありがとうございました。